

昭和三十一年度

眞宗同學會大會研究發表要旨

梵文悲華經より見た

阿彌陀佛本願文に於ける

一、二の問題

宇治谷祐顯

梵文悲華經 *Karunāpūraṅkara* は、一八九八年、公刊されたカルカッタ本のほかに、パリー國立圖書館所藏の寫眞版 (*Bibliothèque nationale, Paris Photo, by Dr. Suzuki*) と京都大學所藏の二本がある。それらを比較考證の上、そこに説かれる阿彌陀佛本願文を考究し、以つて現存漢譯二本、即ち

。悲華經十卷 (北京曇無讖譯 AD 419 と稱せられる)

。大乘悲分陀利經八卷 (秦時 AD 384 ~ 417 と傳へられる)

との對同及び異同を主として踏査してみた結果、漢譯二本との相違點並に「壽經」所説の本願文との關係など幾多の問題が見出し得られるが、今の場合、所與の紙數に制限があるので次の一點のみを

捉えて簡単に研究報告を試みたい。

まづ、さきに結論だけを急ぐと、概して、悲華經の本願文は「壽經」系諸譯本中、所説の阿彌陀佛本願文を基調とし、よくこれを整理接配して、更に改修發展を企てた跡方 (但しこれについては尙幾多のアスペクトから仔細に巧究せなければならぬ餘地は残されている) が、見出し得られるが、就中、これについては梵文悲華經の方が現存漢譯二本よりも、更にそれらの經緯を、より良く明示していると言ふことである。

その例證としては、「壽經」所説の聲明、無數の願事が悲華經にあつては、漢譯二本及び梵本共に菩薩、無數の願事に一轉して、阿彌陀佛國は純大乘菩薩の世界にして、聲明、辟支佛の二乘衆缺無と説くことであるが、尙、梵文悲華經にあつては、そうした悲華經獨自の持つ思想とその意氣吹きが現存漢譯二本よりも、より忠實に明示せられていることである。即ち、その第四十二願「臨終現前」の願事に

“*bodhiprāptasya me iyāṣu gaṇanā-tīkṛantāṣu lokadhāruṣu sattvā bodhi-citotpādani kuryyūḥ / mama bud-*

dhakṣetra upapatimākaṅkṣemānaḥ

/ atra ca kuṣalamūlaparināmanam

kuryyūḥ / teṣāṁ cāham naraṇakāla-

samayeṣvagratastīṣṭheya bodhisatt-

vagaṇa parivṛitāḥ / te ca mān dṛi-

ṣṭvā pṛiṇam prasādam ca ………”

「われ菩提を成ずるの時、餘地の無數の世間に於ける衆生等、菩提心の發起をなし、わが佛國に生るゝことを欲しつゝ、またそこに善根の廻向をなさん。彼等衆生には命終のとき、われ菩薩衆に圍繞せられて、その面前に立つ、而して彼等はわれを見て、歡喜淨心を……云々」

とあつて、特に「菩薩衆圍繞」*bodhi-sattvagaṇa parivṛitāḥ* と掲げている。

このところを漢譯二本の該當箇處を照合してみると、

『悲華經』「臨終之時、我時與大衆圍繞。現其人前」

『大乘悲分陀利經』「彼欲終時、我與無數衆圍繞而現其前」

と見えて、大體「壽經」系諸譯本が均しく掲げる「比丘衆圍繞」即ち、*bhikṣu-saṅgha parivṛitāḥ* (梵文「壽經」第十

八願)とその説相を同じうしている様であるが、いま、梵文悲華經 Karuṅgāpūṭīyaにあつては、相當早い時代に純大乘の思想をうけて淨土の上に一大改新を與へた「菩薩無數」の願事の特質をよく把握し、これを見失わないで正しく「臨終現前」の願に「菩薩衆圍繞 Bodhisattva-gaṇa parivṛtāh」と明示してゐる點、單に「大衆圍繞」「無數衆圍繞」とのみ傳譯する漢譯二本よりも、更に一倍、阿彌陀佛の本願文を整理、改修、發展せしめてゐるものと考へたい。

教義と教化

雲村賢淳

『教行信證』の研究はその書誌學的研究が坂東本解體修理以來、頓に進歩して撰時論も漸く曙光を見出した如き感がある。即ち『教行信證』は聖人畢生の大著で、恐らく關東時代より歸洛御入滅まで、その間幾度も改綴増補され、寛元五年頃一應の完成を見たとは云へ、その後も常に座右に置いて加筆訂正され、依て眞筆本としては一本のみであらうと結論

されるに至つてゐる。而して撰述の意趣に承元の法難を起因とし、而もそれに内在する宗教的對決であつて、佛敎否宗教一般に對して一大批判を加へ、元祖相承の宗旨を鮮明にせんとするにあつたと考へられる。これに對して『淨土文類聚鈔』の撰時論は或は略前廣後説、又は廣前略後説等紛々として未だ解決を見ないけれども、これに關しては既に私見を發表したところである。そこに於いて撰述の意趣が最古寫本たる延慶寫本に傳持者名あるところより、當時の智識ある門弟に與へたものではないであらうかと言ふ立場から見れば、關東教團に於ける有念無念、一念多念の諍論、善慧の異義等、教團の動靜に對してそれを是正せんがために元祖の提擧に居して撰述されたものとせば、その撰時論も自ら明らかにするであらうことを言つた。

かくの如く廣・略二本の相違を撰述の意趣から見るとき、そこには教義の眞理性を鮮明ならしめんとする廣本に對して、略本は安心を傳へんとする意趣をもつて自己の信仰を直裁に述べられたものと見られる。古來、廣・略二本の相違を

教相と安心の關係に於いて論ぜられて來たが、撰述の意趣より見るとき、教義の鮮明と安心の傳達、即ち教義と教化の關係に於いてこれを把握することは出來ないであらうか。併し、教義に對して教化を論せんとすれば、略本より更に他の宗祖撰述の假名聖敎、就中、『唯信鈔文意』『一念多念文意』『未燈鈔』『御消息集』、加ふるに『嘆異鈔』に於ける宗祖の法語等廣く對照すれば、より明らかにするであらう。

由來、教義と教化は別立してあるものでなく、一宗教の両面であつて教義なき教化も、教化を豫想せざる教義も存在しないであらう。それ故、兩者は混然と溶融されてゐるものであるが、教義は教法の理論的構成であつて、その眞理性の開顯が問題であり、教化は教義の應用面であつて教法の機受に於ける安心が如何に傳授されるかが問題である。隨つて、教義を鮮明ならしめる場合と、安心傳授の教化の場合とは自ら異つた表現を取るであらう。即ち教義は他敎に對して自宗の眞理性をあらはすに相對的表現を取るであらうし、教化は卒直に自宗の行信を明